様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００５３１

研究課題名（和文）慣習的推意の多様性に関する実証的・理論的研究：視点と依存性を中心に

研究課題名（英文）Empirical and theoretical investigations of the variation of conventional implicatures: With special reference to viewpoint and dependency

研究代表者
澤田　治（Sawada, Osamu）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：４０５９８０８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、慣習的推意（conventional implicature)(CI)の多様性について、とりわけ、「視点」と「依存性」の観点から考察した。「視点」に関しては、埋め込み環境での解釈に注目し、CIの視点の取り方（話者指向的か主語指向的か）は、文法や文脈などの様々な要因により決まることが明らかになった。また「依存性」に関しては、モダリティや否定と共起するCI表現（例：感情表出的な「何も」や「とても」）に焦点を当て、それらの依存的振舞いを使用条件の観点から説明した。本研究により、CIは自立した意味ステータスを有しているものの、文法やコンテクスト等様々な要因と関わっていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、慣習的推意(conventional implicature) (CI)の自律性について新たな現象から考察している。これまで、CIは狭義の意味論レベルの意味から独立した意味として捉えられてきた(Grice 1975; Potts 2005)。本研究では、モダリティや否定と共起するCI表現（例：感情表出的な「とても」、「何も」、「NPのことだ」）やテンスの曖昧性を引き起こすCI表現（例：「～なんて・とは」）等、文中の他の言語表現や文全体の意味と相互作用を引き起こすCI表現に焦点を当て、CIは自立した意味ステータスを有しているものの、他の言語部門と密接に関わっていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study examined the variation of conventional implicature (CI), particularly in terms of point of view and dependency. Regarding point of view, the study focused on the interpretation of CI expressions in an embedded environment and showed that the way CI takes a point of view (either speaker-oriented or subject-oriented) is determined by various contextual factors. Regarding dependence, the study focused on CI expressions that co-occur with modality and negation (e.g., expressive nani-mo `what-mo' and the expressive totemo `very') and explained their dependent behavior in terms of use-conditions and a general pragmatic principle. Furthermore, this study investigated the interpretation of mirative expressions, the discourse structure of pragmatic comparative expressions and inferential use discourse-expressions, and considered the ways in which CIs interact with discourse structure and conversational implicature.

研究分野：意味論、語用論

キーワード：conventional implicature　scalarity　expressives　projective meaning　perspective　dependency　negative polarity item　modality

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

従来、意味論・語用論の分野において、「慣習的推意」(conventional implicature)(以下、CIと略す)は、狭義の意味論的意味（真理条件的意味/at-issue meaning）から論理的に独立した概念であると捉えられてきた（Grice 1975; Potts 2005）。CIとは、Grice(1975)の用語で、ある単語・構文に慣習的に結びついた推意（非真理条件的意味/non-at-issue meaning）のことである。ここでいう「非真理条件的意味」とは、概略、当該の命題の真理値（true/false）を判定する際に関与しない意味を指している。

Potts (2005)は、CIを、次元性(dimensionality)の観点から捉えなおし、CIは、(i)次元的に「言われたこと」（＝意味論的意味）から独立しており、(ii)常に「話し手志向的」な意味を持つと主張した。例えば、(1)の例における「ののしり語」*bastard*は、そのターゲットとなっている対象に対する話し手の否定的な心的態度（もしくは、意見）を、心理条件的意味のレベルではなく、CIのレベルで表している。

(1)　That bastard Kresge is (not) famous.

　　意味論的意味: Kresge is (not) famous.

　　慣習的推意(CI): Kresge is bad, in the speaker’s opinion.

*Bastard*の意味が命題内容から独立している（すなわち、CI）ということは、たとえ文(1)を否定しても、話し手の否定的態度は否定されずに保持されるということからも明らかである。

Potts (2005)は、*bastard* がたとえ「x は…と信じている」という（話し手以外の人物 x の視点が関わる）環境に埋め込まれても、依然として話し手志向的であると主張した。

(2)　Sue believes that that bastard Kresge should be fired.

Bastard が埋め込み環境においても話し手志向的であるという点は、その意味が、真理条件的意味のレベルから独立した意味であるということと深く結びついている。

このような CI の特性は、「ののしり語」以外にも、同格節 (appositives)(Potts 2005)、敬語表現 (Potts and Kawahara 2004)、スケール副詞 (Sawada 2010) (例:「ちょっと」)、評価副詞 (Potts 2005; Liu 2012)、差別的混合表現(McCready 2010, Gutzmann 2012)、終助詞 (McCready 2009),など、様々な現象でも観察されることが明らかになってきている。

しかしながら、近年、CIの「自立性」(independency)に関して問題となり得る現象があることが分かってきた。

２．研究の目的

本研究の目的は、CIの特性について新たなデータ・観点から再考し、CI研究に対し新たな理論・方向性を提出することである。具体的には、(i)「CI表現のモダリティ表現への依存性」と「埋め込み環境でのCI表現の、視点に基づく複数の解釈」（＝補文環境でのCI表現は、①話し手志向的にも、②主語志向的にもなり得る）に焦点を当て、CI表現は、自立した意味ステータスを持っているのか、CI表現の多様な振る舞いはどのように説明できるのか、CIの多様性は、意味論と語用論の関係に関して何を示唆しているのかという問題を解明する。

３．研究の方法

研究にあたっては・ＣＩ表現と呼べる表現の中で、モダリティと共起することが義務的となっている表現（「とても（じゃないが）」や推論用法の「～のことだ」など）に焦点を当て、それ

らのモダリティへの依存性は、統語レベルや論理レベルではなく、使用条件レベル（＝談話レベル）によって規定されているという仮説を立て、様々なデータ、判断テストを基に検証する。また、これらの現象が、モダリティや証拠性の理論に対して何を示唆しているのかという問題についても考察する。また、CI 表現の埋め込み環境における解釈に関しては CI 表現が態度動詞の補文に埋め込まれ、視点が話し手から主語に移った場合、CI 表現の意味は、真理条件的意味へと変換されるという仮説を立て、様々なデータ、判断テストを基に仮説を検証する。

４．研究成果

具体的な研究成果は以下の通りである。

（１）依存的 CI 表現の「何も」と「とても」

本研究では、感情表出用法の「何も」と「とても」の意味・使用について考察した。

(3) a.太郎は何も食べなかった。　（非感情表出用法）
　b. 何も急いで（それを）する必要はない。　（感情表出用法）
(4) a.この本はとても高い。　（非感情表出用法（＝形容詞修飾用法））
　b. 徹夜（をする）などとてもできない。　（感情表出用法）

(3a)の「何も」は、食べ物をまったく食べなかったということを表しており、ここでの「何も」は文の命題の一部となっている。一方、(3b)の「何も」は、当該の命題（「急いでそれをする」）の外にあって、それに対する話者の否定的態度を表している。また、(4a)の「とても」は、形容詞「高い」を修飾し、命題内容の一部となっているのに対し、(4b)の「とても」は、「徹夜をする」という行為の不可能性を強調しており、話者の命題（「徹夜をすること」）に対する否定的な態度を表出している。ここで重要な点は、感情表出的な「何も」と「とても」は通常の非感情表出的用法と異なり、特定の否定的なモダリティと共起する必要があるという点である。本研究では、以下の 2 点を主張した。(i) 感情表出的な「何も」は、「当該の命題 *p* は必然的ではない」という慣習的推意（CI）を有しており、この慣習的推意が、非必然性を表す否定的モダリティと共起する要因となっている。(ii) 感情表出的な「とても」は、当該の命題のありえなさ・不可能性を強調する CI 的機能が不可能性・ありえなさを表すモダリティと共起する要因になっている。

　これらの２つの感情表出表現に共通している点は、それらが否定極性項目として振舞っているという点である。本研究では、自然言語には、統語論的・意味論的メカニズムによって認可される NPI 以外に、「否定的な反応」という言語行為的機能により、否定環境で生じるような「言語行為的 NPI」が存在することを明らかにした(澤田 2019⑩, Sawada 2021a⑪)。

（２）依存的な CI 表現「NP のことだ」

依存的な CI 表現のさらなる例として、研究協力者の澤田淳氏と共に、推論用法の「のことだ（から）」の依存的振舞いについて考察した。以下の例に見られるように、「から」の無い「NP のことだ」は、独立文であるにも関わらず、後続文との間に依存関係を保持しており、後続文無しには成立し得ない。

(5)　太郎のことだ。この時期忙しいだろう。

本研究では、「NP のことだ（から）」は，特定の個体（NP）の属性を証拠にして、後続命題を

推論する表現であるが、この表現自体の意味は、at-issue 的な意味ではなく、CI の性質を持っている。本研究では、「NP のことだ（から）」は、NP が示す特定の個体に関する属性を証拠にして、後続命題を推論する場合に用いることができることを論証した（澤田・澤田 2020⑬）。

（３）CI 表現の埋め込み環境での解釈

本研究では、CI表現の多様性について、埋め込み環境においての解釈について、不満の「もっと」の視点および投射的振舞いについて考察した。(6)における2例の対比からわかるように、通常、補文内の不満の「もっと」は主語志向的な意味しかないが、主節に「べきだ」が挿入されると、話し手志向的にも主語志向的にもなりえる。

(6) a. 太郎はもっとしっかりとした論文を書かなければならないと思っている。
（不満の「もっと」＝「主語志向的」）
b. 太郎はもっとしっかりした論文を書かなければならないと思うべきだ。
（不満の「もっと」:「主語志向的」/「話し手志向的」）

このような依存的な投射は、通常の CI 表現（bastard 等の罵り語(=2)）には見られない特徴である。本研究では、CI 表現の中には、態度動詞の補文の中の CI が文全体の視点と一致することを義務付けるものと、義務づけないものがあり、その違いは、CI が、視点と関わる命題内容語句を修飾しているかどうかによって決まることを明らかにした。また、埋め込み文中の CI 表現の視点が話し手から主語に移った場合、CI 表現の意味は、secondary at-issue meaning へと変換されるということも論証した。本研究の成果は、Sawada (2018⑧, 2019⑨)として出版した。

（４）驚きを表す「なんて」、「とは」の意味

研究協力者の澤田淳氏と共に、CI と真理条件的意味の関係について、驚きを表す「なんて・とは」の意味解釈に焦点を当てて考察した。(7)の文で表されているように、「なんて」、「とは」が伴った文は、しばしばテンスの解釈に関して、「過去読み」と「未来読み」で曖昧になる。

(7) a. 太郎が来る{なんて/とは}。　b. 太郎が来る{なんて/とは}驚きだ。
（過去読み：太郎が来たことは驚きだ）
（未来読み：太郎が来ることに予定であることは驚きだ。）

このようなテンスの曖昧性は、「なんて」を除いた「ル」形を伴った単文（＝「太郎は来る」）には見られない。また同様の曖昧性は、補文標識として振舞う「なんて」にも見られる。本研究では、「なんて」と共起する命題はテンスに関して不特定であり、コンテクストによってテンスが指定されることを論証した。これまでの研究では、CI 表現は命題の真偽性には関与しないとされてきた。本研究では、CI 表現の有無が at-issue 命題の真理条件に影響を与えるケースがあることを論証した。得られた研究成果は、Sawada and Sawada (2021⑭)等で発表した。

（５）感情的・感覚的な最小化詞の意味

CI 表現の多様性を考察する上での、新たな課題として、最小化詞の感覚敏感性と感情表出性について考察した。以下の例に見られるように、日本語の「かすかに」、「ほのかに」は、典型的な程度副詞の「少し」と異なり、感覚に基づいて程度を計量する副詞である。

(8) a.このお酒は{少し/かすかに}甘い。

b. このお酒は｛少し/*かすかに｝高い。

本研究では、「かすかに」の感覚的な計量の意味を CI の観点から分析した(Sawada 2021b⑫)。

さらに、否定極性項目の「かけら」が持つ「不満」の意味に注目し（例: 「あの政治家には、責任感のかけらもない」)、「かけら」の持つ使用条件を CI との関係の中で考察した。今後はこれらの最小化詞の多様性ついてさらに詳細にデータを観察し、分析を深めたい。

まとめ：以上のように、本研究では、CI の多様性・自律性について様々な現象を基に考察したが、本研究により、CI は狭義の意味論レベルから独立した意味を有しているものの、文中の他の表現やコンテクストと密接に関係していることが明かになった。また研究を行う中で新たな課題として、CI の極性敏感性、談話構造と CI の関係、前提と CI の関係等、様々な新たな課題・問題点が浮き彫りとなった。今後はこれらの問題や課題を踏まえた上で、CI の性質についてさらに考察を続けたい。

＜引用文献＞

① Gutzmann, Daniel. 2011. Expressive modifiers & mixed expressives. In O. Bonami and C. Hofherr, P. (eds.), *Empirical Issues in Syntax and Semantics* 8, 123-141.

② Liu, Mingya. 2012. *Multidimensional Semantics of Evaluative Adverbs*. Leiden/Boston: Brill.

③ McCready, Elin. 2009. What man does. *Linguistics and Philosophy* 31, 671-724.

④ McCready, Elin. 2010. Varieties of conventional implicature. *Semantics and Pragmatics* 3, 1-57.

⑤ Potts, Christopher. 2005. *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford: Oxford University Press.

⑥ Potts, Christopher and Shigeto Kawahara. 2004. Japanese honorifics as emotive definite descriptions. *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory* 14, 235- 254. Ithaca, NY: CLC.

⑦ Sawada, Osamu. 2010. *Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers*. Ph.D dissertation, University of Chicago.

⑧ Sawada, Osamu. 2018. *Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers: The Semantics-Pragmatics Interface*. Oxford: Oxford University Press.

⑨ Sawada, Osamu. 2019. Interpretations of the embedded expressive *motto* in Japanese: Varieties of meaning and projectivity. In D. Gutzmann and K. Turgay (eds.), *Secondary Content: The Semantics and Pragmatics of Side Issues*, 341–375. Leiden: Brill

⑩ 澤田治. 2019.「感情表出表現として振る舞う否定極性表現の意味・機能について—「何も」と「とても」を中心に—」, 澤田治, 岸本秀樹, 今仁生美（編）,『極性表現の構造・意味・機能』, 311-334. 東京: 開拓社.

⑪ Sawada, Osamu. 2021a. The Japanese reactive attitudinal *nani-mo*: A new class of negative polarity items. *Gengo Kenkyu* 160: 43-68.

⑫ Sawada, Osamu. 2021b. Scalar properties of Japanese and English sense-based minimizers. *Proceedings of the Linguistic Society of America* 6(1): 433-447.

⑬ 澤田淳・澤田治. 2020.「「NP のことだ（から）」の因果的推論の方向性」,『日本語文法』20(1): 37-52.

⑭ Sawada, Osamu and Jun Sawada. 2021. Cross-linguistic variations in the interpretation of tense in mirative sentences: A view from Japanese mirative expressions *nante/towa*. In A. Trotzke and X. Villalba (eds.), *Expressive Meaning Across Linguistic Levels and Frameworks*, 216-247. Oxford: Oxford University Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計23件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Sawada, Osamu	４．巻 160
２．論文標題 The Japanese reactive attitudinal nani-mo: A new class of negative polarity items	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Gengo Kenkyu	６．最初と最後の頁 43-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11435/gengo.160.0_43	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Sawada, Osamu	４．巻 28
２．論文標題 The Japanese reactive attitudinal nani-mo: Polarity sensitivity and the function of objection	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	６．最初と最後の頁 131-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Osamu Sawada and Jun Sawada	４．巻 NA
２．論文標題 Cross-linguistic variations in the interpretation of tense in mirative sentences: A view from Japanese mirative expressions nante/towa	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Expressive Meaning Across Linguistic Levels and Frameworks	６．最初と最後の頁 216-247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/oso/9780198871217.003.0011	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Sawada, Osamu	４．巻 18
２．論文標題 Interpretations of sense-based minimizers in Japanese and English: Local and global sense-based measurements	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Proceedings of the Eighteenth International Workshop of Logic and Engineering of Natural Language Semantics (LENLS 18)	６．最初と最後の頁 161-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sawada, Osamu and Jun Sawada	4．巻 13
2．論文標題 Information structure of the Japanese mirative demonstrative ano	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Kobe Papers in Linguistics	6．最初と最後の頁 16-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81013090	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Osamu Sawada and Jun Sawada	4．巻 12331
2．論文標題 The ambiguity of tense in the Japanese mirative sentence with nante/towa.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 New Frontiers in Artificial Intelligence (JSAI-isAI 2019), Lecture Notes in Computer Science	6．最初と最後の頁 325-340
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-3-030-58790-1_21	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Osamu Sawada	4．巻 6 (1)
2．論文標題 Scalar properties of Japanese and English sense-based minimizers	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Proceedings of the Linguistic Society of America	6．最初と最後の頁 433-447
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3765/plsa.v6i1.4979	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 澤田治	4．巻 N/A
2．論文標題 「グライス語用論」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『はじめての語用論―基礎から応用まで』	6．最初と最後の頁 24-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sawada, Osamu and Jun Sawada	4．巻 16
2．論文標題 The ambiguity of tense in the Japanese mirative sentence with nante/towa	5．発行年 2019年
3．雑誌名 The Proceedings of Logic and Engineering of Natural Language Semantics (LENLS) 16	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 澤田治・岸本秀樹・今仁生美	4．巻 N/A
2．論文標題 「序論―極性表現の構造・意味・機能―」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『極性表現の構造・意味・機能』	6．最初と最後の頁 1-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 澤田治	4．巻 N/A
2．論文標題 「感情表出表現として振る舞う否定極性表現の意味・機能について―「何も」と「とても」を中心に―」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『極性表現の構造・意味・機能』	6．最初と最後の頁 311-334
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 澤田治	4．巻 N/A
2．論文標題 「慣習的推意―インターフェースの観点から―」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『言語におけるインターフェイス』	6．最初と最後の頁 138-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sawada, Osamu	4．巻 N/A
2．論文標題 The discourse-pragmatic properties of the Japanese negative intensifier totemo	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『場面と主体性・主観性』	6．最初と最後の頁 593-613
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 澤田淳・澤田治	4．巻 16
2．論文標題 「「のことだ（から）」の推論用法について―モダリティとの関係性を中心に―」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Proceedings of the Modality Workshop	6．最初と最後の頁 101-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sawada, Osamu and Jun Sawada	4．巻 16
2．論文標題 The meaning and use of the Japanese mirative expressions nante/towa	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Proceedings of the Modality Workshop	6．最初と最後の頁 89-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sawada, Osamu	4．巻 N/A
2．論文標題 Interpretations of the embedded expressive motto in Japanese: Varieties of meaning and projectivity.	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Secondary Content: The Semantics and Pragmatics of Side Issues	6．最初と最後の頁 341-375
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/9789004393127_014	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 澤田淳・澤田治	4．巻 20(1)
2．論文標題 「「NPのことだ（から）」の因果的推論の方向性」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『日本語文法』	6．最初と最後の頁 37-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 澤田治	4．巻 21
2．論文標題 「加藤泰彦著『ホーン『否定の博物誌』の論理』」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『語用論研究』	6．最初と最後の頁 187-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sawada, Osamu	4．巻 4 (21)
2．論文標題 Scalarity and alternatives of Japanese mora (letter)-based minimizers	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Proceedings of the Linguistic Society of America	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3765/plsa.v4i1.4525	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Sawada, Osamu	4．巻 15
2．論文標題 On the meaning and use of the Japanese mora-based minimizers	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Proceedings of the Modality Workshop 15	6．最初と最後の頁 159-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sawada, Osamu	4．巻 38 (No.1-2)
2．論文標題 Varieties of positive polarity minimizers in Japanese	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Studies in Language and Literature	6．最初と最後の頁 189-236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sawada, Osamu	4．巻 15 (paper 18)
2．論文標題 The Japanese negative totemo: From an unconditional expression to an expressive intensifier	5．発行年 2018年
3．雑誌名 The Proceedings of Logic and Engineering of Natural Language Semantics (LENLS) 15	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sawada, Osamu	4．巻 14
2．論文標題 On the Japanese NPI totemo: Between unconditionality and intensification	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Proceedings of the International Modality Workshop	6．最初と最後の頁 117-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計23件（うち招待講演　3件／うち国際学会　11件）

1．発表者名 Sawada, Osamu
2．発表標題 On the properties of expressivity and counter-expectation in the Japanese minimizer NPI kakera ‘ piece ’
3．学会等名 The 96th Annual Meeting of the Linguistic Society of America（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 Sawada, Osamu
２．発表標題 The scalar contrastive wa in Japanese
３．学会等名 Syntax and Semantics Conference in Paris (CSSP 2021)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Sawada, Osamu
２．発表標題 Interpretations of sense-based minimizers in Japanese and English: Local and global sense-based measurements
３．学会等名 The Eighteenth International Workshop of Logic and Engineering of Natural Language Semantics 18 (LENLS18)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Sawada, Osamu
２．発表標題 On the properties of expressivity and counter-expectation in the Japanese negative polarity kakera ‘ piece ’
３．学会等名 Kobe-NINJAL Linguistics Colloquium (日本語研究の最前線2)
４．発表年 2022年

１．発表者名 澤田治
２．発表標題 感情表出性を持つ不定表現の意味・機能
３．学会等名 日本英文学会北海道支部第66 回大会（シンポジウム「不定語研究の展開と展望」）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Sawada, Osamu
２．発表標題 Sense-based minimizers in Japanese and English: Speaker's experience, evaluation, and the relation with emotions
３．学会等名 ICU Linguistics Colloquium（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Osamu Sawada
２．発表標題 The scalar properties of English and Japanese sense-based minimizers
３．学会等名 The 95th Annual Meeting of the Linguistic Society of America（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Osamu Sawada
２．発表標題 The Japanese reactive attitudinal nani-mo: Polarity sensitivity and the pragmatic function of objection
３．学会等名 Japanese/Korean Linguistics 28（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Osamu Sawada
２．発表標題 Sense-based minimizers in English and Japanese: Speaker's experience and classification of scales
３．学会等名 International Conference on English Linguistics（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Sawada, Osamu and Jun Sawada
２．発表標題 The ambiguity of tense in the Japanese mirative sentence with nante/towa
３．学会等名 Logic and Engineering of Natural Language Semantics 16 (LENLS 16)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Sawada, Osamu and Jun Sawada
２．発表標題 The interpretation of tense in the Japanese mirative expressions nante/towa.
３．学会等名 Functional Categories and Expressive Meaning（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 澤田治・澤田淳
２．発表標題 「推論用法の「NPのことだ（から）」の因果的特性について―形式、意味、談話のインターフェース―」
３．学会等名 関西言語学会ワークショップ「日本語における意味と語用のインターフェース：談話表現を中心に」
４．発表年 2019年

１．発表者名 澤田治
２．発表標題 日本語のモーラに基づく最小詞の（非）字義的用法について ： 形式意味論・対照言語学的アプローチ
３．学会等名 Prosody and Grammar Festa 4
４．発表年 2020年

１．発表者名 Sawada, Osamu and Jun Sawada
２．発表標題 The meaning and use of the Japanese mirative expressions nante/towa.
３．学会等名 The 16th Modality Workshop
４．発表年 2019年

１．発表者名 澤田淳・澤田治
２．発表標題 「「のことだ（から）」の推論用法について―モダリティとの関係性を中心に―」
３．学会等名 The 16th Modality Workshop
４．発表年 2019年

１．発表者名 Sawada, Osamu
２．発表標題 On the literal and non-literal interpretations of the Japanese mora-based minimizer
３．学会等名 The International Workshop on Degrees and Grammar: An East Asian Perspective (DeG 2019).（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Sawada, Osamu
２．発表標題 The scalarity and alternatives of Japanese mora (letter)-based minimizers
３．学会等名 The 93rd Annual Meeting of the Linguistic Society of America.（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Sawada, Osamu
２．発表標題 The Japanese negative totemo: From an unconditional expression to an expressive intensifier
３．学会等名 Logic and Engineering of Natural Language Semantics 15 (LENLS 15)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Sawada, Osamu and Jun Sawada
２．発表標題 The Japanese inferential -no koto-da-(kara): Explicit and implicit causal marking
３．学会等名 Implicit and explicit marking of discourse relations: the comparison between causals vs. conditionals（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Sawada, Osamu
２．発表標題 On the meaning and use of the Japanese mora-based minimizers
３．学会等名 The 15th Modality Workshop
４．発表年 2019年

１．発表者名 Sawada, Osamu
２．発表標題 On the Japanese NPI totemo: Between unconditionality and intensification
３．学会等名 The 14th International Modality Workshop
４．発表年 2018年

１．発表者名 Sawada, Osamu
２．発表標題 Expressive NPIs: The case of the Japanese negative totemo
３．学会等名 Semantics and Pragmatics Workshop at Mie University
４．発表年 2018年

１．発表者名 澤田治
２．発表標題 感情表出表現として振る舞う否定極性表現について
３．学会等名 ワークショップ: 極性表現の構造・意味・機能
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 澤田治・岸本秀樹・今仁生美	４．発行年 2019年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 400
３．書名 『極性表現の構造・意味・機能』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	澤田　淳 (Sawada Jun)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関